The Kamenori Community
かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

公益財団法人
かめのり財団
The Kamenori Foundation

2019年3月 No.30

かめのりカレッジ2019

今号の内容

◇ かめのりフォーラム2019
ゲストスピーチ
体験発表
かめのりセッション
第12回かめのり賞表彰式
◇ かめのり中高生アンバサダープログラム2019
◇ かめのりカレッジ2019
◇ ベトナム中学生日本語キャンプ2019

かめのりフォーラム2019 開催

2019年1月11日(金)アルカディア市ヶ谷において「かめのりフォーラム2019」が開催され、約140名の方が参加されました。今年度は21団体・個人から応募があった「かめのり賞」の表彰式では「草の根部門」と「人材育成部門」を受賞した3団体の代表者が活動紹介を行いました。奨学生・プログラム参加生の代表4名による体験発表では、それぞれがプログラムを通じて得た有意義な体験を語りました。最後に、今年度から開始する新プログラム「かめのりカレッジ」で講師を務めるグローバルビュージャパン代表の山本智巳氏によるゲストスピーチ「グローバルで活躍するために」が行われました。

弊財団 理事長 木村 晋介

詳細は次ページにてご紹介します。

かめのりフォーラム2019

第１部は、公益財団法人かめのり財団理事長木村晋介のあいさつから始まりました。「弊財団の活動目的は、『アジア・オセアニアの若い世代の異文化交流を通して、グローバルな視野をもった人材を育成すること』だが、昨今の国際情勢を見るに多文化共生の難しさを実感せざるを得ない。しかし、若い皆さんにはこの困難を乗り越えて活躍されることを期待しています」と、力強いエールを贈りました。

つづいて来賓を代表して独立行政法人国際交流基金上級審議役の松川憲行氏より祝辞をいただきました。国際交流基金とは2012年から「にほんご人フォーラム」事業を共催。にほんご人とは日本語を使ってコミュニケーションをする人々のことですが、昨年もバリ島で日本語を学ぶインドネシア・マレーシア・タイ・フィリピン・ベトナムの教師とその５ヵ国と日本の高校生で開催されました。もう一人の来賓祝辞は公益財団法人公益法人協会理事長雨宮孝子氏から公益財団の意義、社会への貢献についてお話しいただきました。

今年の「かめのり大賞」は、３団体が受賞されました。このセクションはかめのり財団の評議員であり、かめのり賞選考委員でもある宮嶋泰子が司会を務め、３団体の代表者は、具体的な活動内容や経緯、成果等を映像を交えて紹介しました。かめのり財団創始者であり評議員の康本健守より受賞団体に記念のトロフィーと副賞として活動奨励金100万円が贈呈されました。

来賓挨拶
（独）国際交流基金
上級審議役 松川憲行氏

来賓挨拶
（公財）公益法人協会
理事長 雨宮孝子氏

来賓祝辞
（公財）YFU日本国際交流財団
専務理事 江夏啓子氏

評議員 康本健守

ゲストスピーカー
グローバルビュージャパン
代表 山本智巳氏

かめのり財団では2018年度も、アジアからの大学院留学生への奨学支援をはじめ、さまざまな異文化交流事業が展開されましたが、それらの事業に参加した中学生から大学院生まで４名のフレッシュな体験発表がありました。

さて、かめのりフォーラムの今回のゲストスピーカーは、グローバルビュージャパン代表の山本智巳氏です。山本氏には日本IBMやベルリッツ・ジャパンで活躍し、グローバルリーダーの育成プログラムに取り組んできた体験をもとに「グローバルで活躍するために」と題した講演をしていただきました。

続いて、第２部懇親会が開かれました。初めに主催者を代表して康本健守があいさつをし、公益財団法人YFU日本国際交流財団専務理事江夏啓子氏より、来賓の祝辞をいただきました。YFUとは今期も「高校生短期交流プログラム」で、日本の高校生10名を韓国に派遣。ホストファミリーで生活しながら現地の高校に１カ月間通うという貴重なプログラムを共催しました。

懇親会が始まるとかめのり賞受賞者と意見交換をしたり、参加生や奨学生に声をかける人たちも次々といて、地域や世代を超えた交流が生まれました。一段落したところで今期のプログラム参加生、奨学生たちが次々と壇上に上がり、ひとり一人発言しました。彼らの貴重な体験がいつか花開くことを期待して、かめのり財団は2019年も新たな事業に挑戦していきます。

報告：悠プランニング　山本 加津子

かめのりフォーラム 2019

奨学生・参加生たちの体験発表

体験発表のトップバッターは「中学生交流プログラム（インドネシア）」に参加した北海道の中学生、宍戸響さん。「世界をこの目で見たかった」という宍戸さんは英語力に不安を感じていましたが、表情や身振り手振りはじめ言葉以上にコミュニケーションの大切さを学びました。「にほんご人フォーラム」に参加した東京の高校生斎藤夏鈴さんは、アセアンの高校生たちが失敗を恐れずに日本語を使い、積極的に話しかけてくる姿に刺激を受け、今後の英語学習に生かしたいと話しました。また、プログラムの参加により自分の世界、将来の幅が広がった実感を持ったそうです。「かめのり中高生アンバサダープログラム」は東京の高校生江野本諭吉さんが発表。フィリピンの高校生と３日間にわたり現地のゴミ問題を調査研究、議論し、提案にまとめて発表する協働作業を行いました。発表時にダンスパフォーマンスを加えたり、夜のパーティーでは民族衣装のファッションショーになるなど驚きの異文化体験もあり、東南アジアへの興味が一層強まりました。最後は中国から留学中の陳晨さんで、法政大学大学院で「平家物語」の研究をしています。「かめのり奨学生」として支援を受けた恩恵は「中国の若い世代に日本文化や文学を伝えていくことで貢献したい」と、力強く話しました。

思い思いに体験を発表する代表者たち

ゲストスピーチ

グローバルで活躍するために

グローバルビュージャパン代表
山本 智巳 氏

【プロフィール】1977年日本IBMに入社。執行役員として日本人のグローバルリーダー育成の必要性を痛感。その後ベルリッツジャパン代表取締役となり、企業向けグローバルリーダー育成のためのプログラム開発等を行う。現在はグローバルビュージャパン代表として、企業改革、人材育成などの企業支援を行っている。

現在はグローバル化に対する反発、ゆり戻しが起きている時期ですが、ここ数十年ものすごいスピードでグローバル化が進行したゆえでしょう。私が勤務したＩＢＭでいえば、本社はアメリカですが、ハードウエアの購買の本部は中国に、人事の業務処理はフィリピンに、経理の業務処理はマレーシアにというように、それぞれの機能によって最適な場に置いていました。これらの横軸と縦軸をうまく組み合わせて業務効率を上げるのは大変なことですが、しかしそうしていかないとこれからの世界では生き残れないと考えているわけです。とくにアメリカ系企業はこのようなグローバル化をどんどん進めています。これからは企業買収、企業提携なども次々と起き、一方でＡＩの発達などもあって、ますます不透明、不連続です。みなさんはそうしたグローバル社会で働くことになるのです。

そこで、日本人がグローバルで活躍するためには何が一番不足しているのか、外国人たちに聞いてみました。すると一番の問題点が以下でした。

Visibility＝可視化。もっと目立て！
Clarity=明快さ

例えば、海外の国際会議に日本の代表として一人で参加します。さて、あなたは会場のどこに座りますか？ … 一番前、真ん中をめざしてください。最初からプレゼンスを上げることはとても重要です。そして必ず質問をしてください。質問の練習をするのがスタートポイント。必ず質問しているとどんどん上手になります。プレゼンテーションも大事ですね。効果的なプレゼンテーションは、言語以外のところ、アイコンタクト、ゼスチャー、ボディポジション（体の使い方）･･･これらはトレーニングでうまくなります。シナリオやスライドももちろん大事です。ただ、日本人だけの場で欧米流のプレゼンをすると、上手くいかない場合もあります。だから、ジャパンスタイルとグローバルスタイルの２つを身につけてプレゼン上手になってください。

グローバルな企業では、さまざまなカルチャーを持った人がいて、上司に対する態度ひとつもフラットなほうがいいか、丁重なほうがいいかなどさまざま、みんな違います。多様性から生まれるリスクをなくし、新たな価値を造るには、一人ひとりが異なった意見や価値観を持っていることを認識したうえで、お互いに理解を深めることが重要なのです。

最後に「英語力」のこと。世界中で１７億人くらいが英語を話せますが、ネイティブスピーカーはそのうちの２割。つまり１４億人くらいはノンネイティブ、ブロークンイングリッシュです。正しい英語を話すことは重要ですが、しかししゃべらないことにはなんの役にも立たない。文法などにとらわれず、自分の主張を堂々と話すこと、これが大事です。ぜひブロークンでも英語でどんどんしゃべってください。

かめのり中高生アンバサダープログラム 2019　フィリピンへの派遣

英語表記の Kamenori Teen Ambassadors Program の頭文字をとって KTAP（ケイタップ）と呼ばれるこのプログラムは、①様々な場で自身のコミュニケーション能力を実感する、②フィリピンの文化、社会などを知り、文化の異同を理解する、③人との協働においてどのような能力が必要なのかを体験を通して知る、の３つを目標としています。

にほんご人フォーラムの仲間たちと

UHF 周辺を子ども達と歩きました

JICA では国際協力の意義について学びました

1月19日、日本各地から12人の中高生が羽田空港に集まりました。彼らにはいくつかの課題が与えられていました。フィリピンの教育、歴史、産業、生活などを調べる、日本文化についてのプレゼンテーションを準備する、JICA での質問を考えてくる、Unang Hakbang Foundation（以下 UHF、貧困地域にある学習支援施設）での遊びを考えてくる、にほんご人フォーラム in フィリピン（以下 JS フォーラム）のテーマ「ECO」や「MOTTAINAI」に関する宿題、やさしい日本語をどう話すかを考え練習してくる、事前オリエンテーションで学んだ簡単なフィリピン語で自己紹介ができるようにしておく等で、これらは９日間のフィリピンでの体験をより深いものにしてほしいという意図で参加生たちに課されました。

事前課題を頑張って日本語でシェアしました

また、一人ひとりが個人の目標を設定して KTAP に参加しました。「悔いなくフィリピンから帰ってくる」「自慢できる９日間をつくる」「フィリピン語で会話する」「思い出じゃなく糧になるようにする」「言いたいことが伝わらなくても諦めずに伝え続ける」「目の前のことと向き合い、挑み続ける」「日本について教え、フィリピンのことをもっと知る」「フィリピン語でたくさん話したい」「やさしい日本語と英語を話す」「何事にも挑戦」「積極的にコミュニケーションをとる」「何事にも Challenge するぞ」

彼らがどんな9日間を過ごしたのか、目標は達成できたのか、帰国後の参加生たちの声を拾ってみました。

「事前にフィリピン語を少し教えていただいていたことが、現地の人と仲良くなることに役立ちました。リサール公園のタスクでは、フィリピン語を使うことによって、現地の人に写真を撮ってもらいやすかったです。そしてフィリピンの歴史について調べていたのが、市内観光でより深く関心をもって見学することに役立ったと思います。」

「この9日間で自分の世界が変わりました。JICA や JSフォーラムでは世界の現状について学ぶことで、自分の生活を見直さなければならないと強く思いました。また、UHF に行き、フィリピンの貧困の格差を体感することによって、自分がどれだけ恵まれた環境で生きているのかを知ることができました。好きなだけ自分の好きなことができる環境に感謝して、多くの人から頼りにされる人になれるよう、英語力を伸ばしつつ、学びを深めていきたいと思います。」

「私は将来世界の状況を自分の声で伝える職業に就きたいと考えていましたが、UHF の周りの小さな家、道路に転がる大量のごみなど様々なものを実際に自分の目で見て、伝えるだけじゃダメだと気付きました。これから、英語をもっと勉強して、海外へのプログラムに参加して、実際に自分の目で見て、手で触れて、世界の状況を知りたいです。また、JSフォーラムやデラサール大学などのフィリピンの学生は”ECO”についても、私

かめのりカレッジ2019

2019年2月22日(金)～25日(月)、茨城県つくばみらい市のスターツ総合研修センターにて、グローバルでの活躍を目指す国内在住の大学生を対象に、グローバルコミュニケーションに必要なスキルセットとマインドセットの醸成を目的としたプログラム「Kamenori College 2019」を実施しました。アジアからの留学生4名を含めた21名が参加し3泊4日のプログラムをすべて英語で行いました。

かめのりカレッジ初回のテーマは「Be Active and Enjoy!」。プログラムでは「かめのりフォーラム 2019」でゲストスピーチを行った山本智巳氏をはじめグローバルコミュニケーションの専門家たちによる実践形式のセッション、大学で教鞭をとる講師たちによる専門的な授業、かめのり財団のプログラムに参加した先輩 2 名による応援スピーチ、そして最終日にチームプレゼンテーションが行われました。参加した学生たちは初日から仲間とともに意欲的に取り組み、4日という短期間ながら、英語で主体的にコミュニケーションを行うためのスキルとモチベーションを向上させ自信を身につけた様子でした。 ■

山本講師に積極的に質問

たちとの交流にしても、とても積極的でした。私も恐れずに自分からどんどんコミュニケーションをとっていこうと思いました。」

「JSフォーラムでは、育った環境も文化も違う人と"ECO"について具体的に話す必要がありました。特にファイナルアウトプットの構成を考えるときは妥協したくない中で想いや考えを伝えるのが難しく、チームのもう一人の日本人メンバーと話し合って、何とかフィリピン人のメンバーにも伝えることができました。休憩、ごはん、ホテルの部屋などどこにいてもフィリピンの高校生たちに囲まれて、しかも話す環境があったから常にチャレンジしていくことができました。英語をがんばったという観点でもJSフォーラムが特に印象に残っています。」

「毎日の振り返りが刺激を受ける場として印象に残っています。自分の考えたことを文章にまとめることで考えを整理することができ、その日の成果と課題、明日の目標を見つけることができました。また、メンバーの自分とは違った視点からの意見は視野が広がるきっかけになりました。」

「フィリピンの人たちの世話焼きな性格、何とかなるでしょう～と常に思っているところ、今を楽しく生きたいと思っているところ、休憩時間はお菓子とおしゃべりでしっかり息を抜ける時間を持っているところ、沢山の素敵な国民性に驚き、そして癒されました。私は日本が大好きだけど、他の国にはその国の素敵なところがあって、世界の国々の中には日本より自分に合う国があるかもしれないと考えていたとき、自分は日本人じゃなくて地球人だから、友達はどこの国の人だっていいし、どこに住んでもいいということを感じました。」

「『KTAP2019』で、私は自分を強く成長させることができたと共に、多くのことを学べたと思っている。今まで内向的だった自分が、交流を通じて、人と話すことが好きになり、コミュニケーション能力を向上できたり、人と協力して何かを作り上げていける協調性を学べたりした。これらは、自分がこれから中心となって何かをしていくときに活かしていきたいと思う。また、JSフォーラムで私たちの班は『プラスチック』のことを考え、世界でのプラスチック消費がとても多いということを強く感じた。これからは、日常的に"ECO"について考え、できるだけプラスチックを使わないことを意識して、一人ひとりが"ECO"に貢献していけるように努めていきたい。」

プログラム活動での刺激はもちろんのこと、新たに知り合った日本人の仲間と共に過ごした時間も貴重な経験になったようです。何事にもまっすぐな姿勢で向き合う友達から学ぶことがあったり、仲間の感じたことや興味のあることを聞き新たな発見をしたり、互いに刺激を受けた9日間でした。

報告：かめのり財団　橋本 成子・渡辺 祥子

最終発表に向けて大いに悩みました

KTAP2019 フィリピン派遣　実施日程

1月 19日(土)	出発
20日(日)	市内観光（イントラムロス内マニラ大聖堂、サン・アウグスティン教会、サンチャゴ要塞、リサール公園）
21日(月)	デラサール高校、大学訪問
22日(火)	JICA、Unang Hakbang Foundation 訪問
23日(水)～25日(金)	にほんご人フォーラム in フィリピン（国際交流基金マニラ日本文化センター主催）
26日(土)	フィリピン音楽・舞踊・古代文字ワークショップ、夕食会
27日(日)	帰国

Kamenori College 2019 Time Table

	Feb. 22nd (Fri.)	Feb. 23rd (Sat.)	Feb. 24th (Sun.)	Feb. 25th (Mon.)
AM		Daily Orientation	Daily Orientation	Daily Orientation
	For Non-Japanese Students Special Guidance for Non-J	Social English	Team Workshop #3	Team Presentation
	Guidance	East Asia's Present and Futures	Global Mind Set	
PM	Orientation Ice Breaking	Life Purpose & Trust	Values & Visioning	Closing
	Global Communication & Team Project			
	Social English	Presentation Skill	Japan from Asian Perspective	
	Welcome Party	Encouraging Speech	Team Workshop #4	
		Team Workshop #2		
	Team Workshop #1			

初日はお互いに手探りで様子を伺っているような状態で、声が小さくシャイな、いわゆる普通の大学生にしか見えなかった参加生ですが、毎日の様々な講義や課題で刺激を受けていくうちに、各自が持つ素晴らしい個性や実力を存分に発揮し、自信を持って活動するようになっていきました。元々素晴らしい資質を備えた学生だったということもあるのでしょうが、本プログラムをきっかけに、この短期間で、ここまで柔軟に自分を変え、それを表現できるようになるのかと本当に驚かされました。今回のような機会でなければ出会うことができない現役のビジネスマンや講師陣からのメッセージや教えは本当に貴重な、私自身も自分の生き方について深く考えさせられるものばかりでした。また、彼らにとって、他大学からの仲間は、普段一緒にいる友達とは異なり、お互いに刺激を与え合える存在だったようで、毎晩遅くまで議論を交わしたり、語り合ったりと、今後もずっと繋がっていける、共通の目標を共有できる仲間になったようです。

どの講義も素晴らしかったですが、特に印象に残っているのは「Life Purpose＆Trust」と「Values＆Visioning」の講義です。これらの講義を通して、学生はこれまで漠然としていた自分のやりたいことや価値観が明確になり、そこからどうやってそれを形にしていく（キャリアに繋げていく）かのヒントを得たのだと思います。これらの講義を受けてから、学生の顔つきや態度が大きく変わりました。「Values＆Visioning」の講義の最後には「6年後の2025年にこのメンバーで同窓会をする」という設定でロールプレイをしました。6年後にどんな自分になっているのかをきちんと心に描き出し、自信に満ちた明るい表情で、仲間や講師と話をしている学生たちの姿を見て、きっと6年後には全員が各自の夢を実現していることだろうと思いました。

日本の教育では、自分自身を知り、それをキャリアに結び付けるよう導く機会がなかなかないように思います。彼らの年齢に私もこのような機会を持っていたら、迷いも少なく、もっと早くに今の場所に辿りついていたのかもしれません。今後もこのようなプログラムが継続され、世界で活躍する若者が育っていくことを心から望みます。また、この機会により、将来グローバル人材になるであろう若者が多く存在していることを今回知ることができ、日本の将来はまだまだ明るいと思いました。

報告：かめのりカレッジ2019 スタッフ　古渡 由香里

チームワークショップ

アジアの留学生とともに

先輩たちによる激励

学生たちのディスカッションに耳を傾ける Brent 講師

最終プレゼンテーション

プレゼンテーションのスキルアップ

第12回かめのり賞表彰式

今年度は21団体・個人の方からのご応募をいただき、外部有識者を含めた「かめのり賞選考委員会」により3団体の表彰が決定、かめのりフォーラムにて正賞の楯と副賞の活動奨励金を贈呈しました。

（尚、今年度は「かめのりさきがけ賞」は該当団体・該当者なし）

第12回かめのり賞表彰（敬称略）

かめのり大賞 草の根部門

特定非営利活動法人 **ISAPH（アイサップ）**

協調と技術支援による保健医療の向上を目指し、2004年に設立したNPO法人。ラオスでの住民保健や栄養改善の総合的な底上げを図る母子保健プロジェクトにより、低体重児の割合や、乳幼児の死亡率の低減に貢献。

ボランティアが調理した栄養豊富な離乳食を試食する子ども。食事・栄養に関する知識や技術を住民に正しく伝えるため、村落栄養ボランティアを育成している。

かめのり大賞 人材育成部門

特定非営利活動法人 **ブレーンヒューマニティー**

兵庫県西宮市を拠点に約600名の大学生が主体のNPO。阪神・淡路大震災で被災した子どもの支援から始まり、野外活動、国内外でのワークキャンプ、不登校児や経済的に困窮する子ども達の支援など幅広く活動を展開。

人口100人の村で7泊8日ホームステイをしながら植林活動を行う「中高生マレーシアワークキャンプ」は、大学生が企画立案から当日の引率までおこなう。

学校法人 **アジア学院**

1973年栃木県那須塩原市に創立、アジア・アフリカ等発展途上国の農村指導者を養成する学校。貧困や格差、環境破壊など農村地域の抱える課題に対して、有機農業による自給自足の学びのコミュニティをベースに実践を通して学んでいる。

学生はアジア・アフリカのみならず、将来国際協力や農業の分野で働きたいと願う日本人も対象にしている。1973年の設立以来、約1300名以上がアジア学院で学んでいる。

かめのりセッション

「かめのりフォーラム」に集まったプログラム参加生と奨学生たちは、終了後国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊し、1月12日（土）に「かめのりセッション」を行いました。初めに理事・事務局長西田浩子から「かめのりセッションは振り返りの場、立ち止まり自分で気づくことが重要。今後のステップにしてほしい」「チャレンジし続ける、異文化の人と協働できる、自ら考え創造する人になってほしい」とメッセージがあり、プログラムごとに分かれて振り返りのディスカッションを行いました。食事や習慣など身近なトピックから、どのような学びがあったか、参加前に設定した目標が達成できたか、帰国後どのような行動をしたかなどを話し合いました。次に、全体で発表会を行うと「日本のことを見つめなおす機会になった」「探究心が芽生えた」と言う内容が多く出ました。その後、大学院留学のアジア奨学生によるパネルディスカッションが行われ、異文化コミュニケーションや異国での学びについてそれぞれの体験や考えが語られると共に、「日本の学生にはもっと外国へ出てチャレンジしてほしい」「努力し続けることが大事」といったアジア奨学生ならではのアドバイスがありました。最後に常務理事西川雅雄による「プログラムを始めとした様々な場にたくさんの人が関わっていることを忘れず、思いやりの気持ちを還元してほしい」と言うメッセージで終了しました。

プログラムごとに小グループになっての振り返りセッション

大学院奨学生からは、後輩たちへの励ましの言葉も

ベトナム中学生日本語キャンプ 2019

「ベトナム中学生日本語キャンプ2019」が2019年3月1日(金)～3日(日)にハノイで開催されました。6つの都市・地域(ハノイ、ハイフォン、ダナン、フエ、ホーチミン、ビンズオン)で日本語教育が導入されている中学校32校から生徒51名、教師17名が参加しました。

日本語を学ぶベトナムの中学生とその教師たちが一緒に笑顔で撮った集合写真

今年で6回目を迎えた中学生キャンプは、「ふるさと」をテーマに開催されました。このキャンプで生徒が取り組んだのは、「ふるさと」をテーマにした日本語劇の制作です。今年は初の試みとして、ファシリテーターの役割をベトナム人の先生方に担って頂くこととし、全体の進行役として4名、そして生徒の活動のサポート役として6名の先生方に活躍して頂きました。また、他に7名の先生が生徒の引率だけでなく、教師プログラムに参加し、生徒の活動の様子を観察し生徒の新たな一面を見つけ、最後に生徒それぞれにメッセージを手渡しました。

1日目は簡単なアイスブレイクから始まり、夜は開会式とキャンプファイヤーが行われました。ダンスやゲームをして楽しむ中で、新しい友達との交流を深め、最後には日本語で「ふるさと」を歌い、全員の団結心が高まりました。

キャンプファイヤーの活動で新しい友達が沢山出来ました

日本語劇を制作する様子

2日目は劇の制作です。様々な活動を通して、「ふるさと」の内容や意味を考え、劇という形にしました。まず、日本語を使って「ふるさと」について1人で日本人にインタビューをし、それをヒントにグループで自分たちの劇のテーマについて話し合いました。日本語で会話ができた喜びは、日本語を話す自信に繋がります。更に、チームワークを必要とする活動を通して、劇を作る過程で重要となる協調性や協働力はもちろんのこと、発声方法、表現力や発想力などを学びました。

劇の制作は正味1日という短期間でしたが、生徒は積極的に日本語を使いながら自分の持ち味、良さをお互いが認め合い、試行錯誤を繰り返しながら劇を完成させました。

最終日は、いよいよ劇の上演です。自分の番になると、斬新なアイディアで作られた衣装や小道具を身にまとい、日本語で堂々と自分達の劇を演じ切りました。上演後の生徒達はまだ興奮気味で、達成感と自信に満ち溢れた笑顔が大変印象に残りました。

生徒が制作した日本語劇を演じる様子

全てのプログラムを終えた後には、泣いて別れを惜しむ姿が見られ、「帰りたくない。またキャンプに来たい。」と仲間同士で肩を組んでいる様子が非常に感動的でした。

このキャンプは、準備段階から当日に至るまで、生徒、教師、スタッフが一丸となって協力して作り上げたキャンプです。このキャンプが生徒の「こころのふるさと」となり、生涯忘れられない経験としてこれからも日本語学習を続けてくれることを願っています。

報告：国際交流基金 ベトナム日本文化交流センター
森近 美菜

今後の予定

5月 かめのりカレッジ2019
振り返りセッション＆修了証授与式

6月 第13回かめのり賞 募集開始

参加者募集　かめのりスクール2019

今夏実施する、日本とアジアの中高生が協働し課題に取り組むプログラム「かめのりスクール2019」が7月26日(金)～29日(月)の4日間、御殿場で行われます。
応募締切は、2019年5月17日(金)です。
詳細は4月中旬以降にホームページでご確認ください。

発行人／西田　浩子　　編集／堀井　玲子　　デザイン／イワブチサトシ（BUTI design）　印刷／佐伯印刷株式会社

日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！
公益財団法人 かめのり財団　The Kamenori Foundation
〒102－0083　東京都千代田区麹町5－5　ベルヴュー麹町1階
TEL：03-3234-1694　FAX：03-3234-1603
E-mail：info@kamenori.jp　URL：http://www.kamenori.jp/